

Title	名誉教授山田雄三年譜(自記)
Author(s)	山田, 雄三
Citation	一橋論叢, 55(1): 155-160
Issue Date	1966-01-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/2912
Right	

名誉教授山田雄三年譜(自記)

明治三十五年

十二月三十日 山梨県甲府市八日町二丁目四十六番地に生まる。家は二文字屋と号し、漆器商を営む。父忠藏、母しげ、一兄、一姉あり。

明治四十二年(六歳)

四月 東京府立女子師範学校(小石川竹早町)の付属小学校に入學。

これより先、明治四十年頃、父母にしたがい、東京に出る。甲府の店はもっぱら祖父があたり、父は小石川掃除町(いまこの地名なし)で川瀬某氏とともに脱脂綿工場を営む。事業思わしからず、やがて工場をやめて久堅町に移転。ここから女子師範の幼稚園および小学校に通う。

明治四十三年(七歳)

四月 埼玉県岩槻の小学校に二年の一学期だけ通學。父は再び脱脂綿工場を岩槻在で営む。

八月

大出水に遭う。たまたま甲府の祖母死去し、これを機会に一家甲府に引きあぐ。二年の二学期より甲府市立相生小学校に転校。

大正二年(十歳)

八月

甲府八日町の店破産。前年十二月祖父死去。一家、同市百石町に移り、父は若い頃から道楽に習い覚えた謡を教える。大正三年冬、父は単身で朝鮮京城に渡る。

大正四年(十二歳)

三月

相生小学校卒業。小学校五、六年の受持は磯部真澄先生。卒業後直ちに母・姉と三人で京城の父のところへ行く。

四月

京城西大門小学校の高等科一年に入學。渡鮮後、父は小野某氏の出資を得て京城の南大門近くで脱脂綿工場を営んだが、一年足らずで閉鎖、その後はもっぱら謡を教える。京城には数年いたが、

居所を五回ほど変えた。

大正六年 (十四歳)

四月 京城の私立善隣商業学校本科一年に入学。(善隣は当時予科がなく、小学校の高等科を経て入学することになっていた。)夏休みの二週間ばかり元山の須子氏宅に寄寓す。始めて外人たちの海水浴を見たが頗る印象的だった。

大正八年 (十六歳)

三月 善隣商業の本科二年の終り、単身京城より東京に赴き、少し前に上京していた母と一緒に四谷坂町に間借りす。私立大倉商業学校へ転校を許された。(大倉は善隣の姉妹校であったが、その教育水準が非常に高かったため、一年損をして本科二年に転校を許可された。転校について善隣の佐藤春治先生と大倉の長岡弘先生に大へん厄介になった。)

大正十年 (十八歳)

三月 大倉商業学校の本科三年を卒業、直ちに東京商科大学予科の入試に合格。予科時代には哲学に興味を覚え、紀平正美先生のお宅のヘーゲル読書会に通う。これより先、大正九年父も京城を引きあげ、親戚鈴

木氏の会社に勤務。居所は京成四ツ木、麻布一ノ橋、三田四国町などと転じた。大正十二年の関東大震災は三田で遭ったが、家は焼けなかった。

大正十三年 (二十一歳)

三月 母を伴い関西旅行をする。親戚浅川氏の宅に宿泊し、大阪、奈良、和歌山、京都などを見物。四月 東京商科大学本科に進学、福田徳三先生のプロゼミナールに参加。カール・メンガーの経済学原理の新版を読む。

大正十四年 (二十二歳)

四月 福田先生渡欧のため、大塚金之助先生のゼミナールに移る。その頃、左右田喜一郎先生の読書会にも参加、大西祝の倫理学などを読む。

昭和二年 (二十四歳)

三月 東京商科大学の学士試験に合格。卒論のテーマは「カール・メンガー研究」。六月一日 東京商科大学補手(無給)に命ぜられ、福田徳三先生の研究室に配される。その頃、三田から東中野に移転。無給のため、菓鴨高商や同商業で専門外の科目を教えたり、家庭教師もやる。時間をとられるのが辛かった。

昭和四年(二十六歳)

七月二日 東京商科大学助手(有給)に任ぜられる。

昭和五年(二十七歳)

三月九日 森磯次郎長女(泰吉郎妹)敏枝と結婚。親戚浅川栄次郎の媒酌、東京会館でお茶の会。

五月八日 福田先生逝去、爾後中山伊知郎助教授の研究室に

参加。

十二月十二日 長男孜(あつし)生まる。その頃、東中野より下落合に移転。

昭和八年(三十歳)

六月 大倉高等商業学校講師を囑託され、二年間統計学を講ず。

昭和九年(三十一歳)

二月二十二日 次男次良生まる。

二月二十三日 東京商科大学予科教授、兼大学助手に任ぜられる。

この頃大学に日本貿易史の調査室がつくられ、調査研究にあたる。国立に家を借りて、父母と別に住む。

昭和十年(三十二歳)

四月二十四日 父急逝、国立より駆けつけしも臨終に間に合わず。国立の借家を引き上げ、下落合にもどる。

六月 杉村広蔵助教授の学位論文をめぐり、いわゆる白票事件起こる。如水会館にて杉村氏の著作について研究会あり。第一回の報告を担当す。

七月十日 東京商科大学助教授に任ぜられる。

九月十五日 横浜を出帆し、ヨーロッパ留学に向かう。十月

二十三日マルセイユ着、その後ベルリンに暫く滞在、翌年三月下旬ウィーンに赴く。これより約一年

三カ月ばかりここに滞在、ウィーン大学でモルゲンステルン教授のゼミナールや研究会に参加。その

間、オーストリアおよびドイツの諸所、ハンガリー、スウェーデンなどを旅行する。

昭和十二年(三十四歳)

五月 妻敏枝をナポリまで出迎え、イタリヤの諸所見物の

後、六月ウィーンにはいり、同中旬ウィーンを立つ。その後、ドイツ、スイス、イギリスおよびアメリカを経て十一月十八日帰朝。

昭和十三年(三十五歳)

四月 経済学史の講義を担当、始めてゼミナールを受け持つ。

八月 盲腸炎を病み、東大分院にて手術。

昭和十四年 (三十六歳)

五月六日 長女道子生まる。

昭和十五年 (三十七歳)

一月 吉川兼光氏の企画する国際経済調査所に参加。月刊

雑誌『国際経済研究』を刊行して、昭和十九年半ばまでその編集にたずさわる。

昭和十六年 (三十八歳)

四月十日 東京商科大学教授に任ぜられる。経済学史のほか
に統制経済論を担当。

昭和十七年 (三十九歳)

九月 東北大学講師を委嘱され、経済学史を担当。集中講
義のため二回仙台に赴く。

昭和十八年 (四十歳)

一月三日 三男宮三生生まる。

二月 東京商科(産業)大学東亜経済研究所員として中華
民国へ出張を命ぜられ、北京の燕京大学の宿舎に泊
り、調査にあたる。九月帰京。途中二十数年ぶりで
京城に立寄り一泊す。

昭和十九年 (四十一歳)

八月十一日 東京商科(産業)大学図書館長に補せられる。
マンガ―文庫その他貴重図書を長野県伊那の図書館
の一部を借りて疎開させ、終戦後再びこれを引き取
る。二十一年十二月図書館長を免せられる。

昭和二十年 (四十二歳)

二月五日 母死去、前年暮より衰え著しく、栄養の補給思
うにまかせず。

五月 空襲で近所までやられしも、家は無事なり。六月
頃、甲府の磯部真澄氏に頼み、菲崎に家族を疎開さ
せる。

八月 終戦。やがて十月家族も疎開先からもどる。

昭和二十一年 (四十三歳)

四月 担当講義、統制経済論を計画経済論と改む。
七月 小樽経済専門学校で集中講義を行う。往は海路水川
丸にて、復は汽車。小樽にはその後数回行く。
十二月 大蔵省国民資力専門委員会委員を命ぜられる。

昭和二十二年 (四十四歳)

五月 中央大学講師を嘱託され、経済計画論を講ず。三年
ほどやる。

昭和二十四年(四十六歳)

四月 東京経済大学兼任教授に任ぜられ、以後昭和三十八年三月に及ぶ。

昭和二十五年(四十七歳)

十一月 論文『国民所得の計画理論』により経済学博士を授与さる。山口茂・中山伊知郎両教授が審査員。

昭和二十六年(四十八歳)

一月 経済安定本部の国民所得調査連絡協議会委員を命ぜられる。

三月 内閣の国土総合開発審議会専門委員を命ぜられる。

八月 厚生省の社会福祉審議会委員を命ぜられる。(ほとんど出席せず。)

昭和二十七年(四十九歳)

十月 胃潰瘍気味で友人市古鈞一君に診察してもらう。

昭和二十八年(五十歳)

三月 内閣の統計審議会専門委員に命ぜられる。

四月 一橋大学評議員に命ぜられる。

四月 東京大学講師を嘱託され、一年間計画経済論を講義す。

八月二十八日 国民所得国富学会出席のためローマに赴き、

一週間の会議の後、スイス、西ドイツ、ベルギー、イギリスを経て九月二十六日帰朝。

昭和三十年(五十二歳)

四月 一橋大学経済学部長に任ぜられる。昭和三十三年三月まで二年間。

九月 内閣の経済審議会専門委員を命ぜられる。三十三年一月まで。

昭和三十一年(五十三歳)

四月 早稲田大学講師を命ぜられ、大学院にて理論経済学の講義を担当、現在に及ぶ。

十一月 大分大学の講演を機に、別府、耶馬溪に遊ぶ。

昭和三十二年(五十四歳)

六月 内閣の雇用審議会委員を命ぜられる。あまり出席せず。

八月 再び一橋大学経済学部長に命ぜられる。三十三年七月まで。

昭和三十四年(五十六歳)

六月 経済審議会専門委員を命ぜられる。所得倍増計画の計量部会長をつとむ。三十八年四月まで。

七月 小樽の出張講義を機に、敏枝を同道、洞爺、登別に遊ぶ。

十一月五日 日本生産性本部派遣視察団長としてアメリカ経済学視察のため出張。諸大学、研究所、官庁などを歴訪し、十二月二十五日帰朝。

昭和三十五年(五十七歳)

二月 急に胃潰瘍にて出血。二週間安静後、聖母病院入院。精密検査の結果、手術をやらす、二週間ほどして退院。煙草をやめる。

昭和三十六年(五十八歳)

四月 長男孜、加藤実長女雅子と結婚。

九月 経済企画庁の地域経済問題調査会委員を命ぜられ、構造部会長をつとむ。

十月 次男次良、石本義一長女喜子と結婚。

昭和三十七年(五十九歳)

一月十九日 長男の男児学(まなぶ)生まる。

三月 地域経済調査会から関西出張。

十二月二十日 満六十歳の誕生日を迎える。その日大学院学生数を集まる。

十二月三十一日 応接間の新築成り、家族一同計九人集まり、越年す。

昭和三十八年(六十歳)

二月 地域経済調査会から九州出張。

四月 明治大学講師を嘱託され、大学院の経済計画論を担当す。

四月 経済審議会臨時委員を命ぜられる。

五月 国民経済計算審議会委員を命ぜられ、総合部会長をつとむ。

九月二十四日 次男の男児良透(よしゆき)生まる。

昭和三十九年(六十一歳)

四月二十六日 西ドイツ政府の招待にて渡独。ボン、ハンブルグ、フランクフルト、ミュンヘン、ベルリンなどの諸都市を中心に見学し、五月二十二日帰朝。

八月 小樽の出張講義を機に、敏枝を同道、川湯、阿寒などに遊ぶ。

十一月 特殊法人社会保障研究所長として厚生大臣により指名される。

昭和四十年(六十二歳)

一月十二日 社会保障研究所発足す。

二月 四国に出張、高知、高松などを見物。

三月三十一日 一橋大学教授を退官す。翌日付にて一橋大学名誉教授の称号を授与される。